

チは *T. sellaeus* (Fr.) Karst. のために残すのが適當であらう。本州に廣く分布する。

127) シブエノウラベニイグチ (新種)。小形ないし中形の種類で、茎には赤色小鱗片が点在し、孔口は赤色、かさの表皮はときに裂けて鱗片状となり、胞子は卵形～橢円形である。大津市石山千町、同市石山寺辺町、滋賀県瀬田町のアカマツ林、ことにコナラ属の樹下に発生。

128) コヨヘイジ (小与平治、新品種)。歐州産の *R. nauseosa* (Secr.) Fr. は針葉樹林に発生するものであるが、本菌は広葉樹下に発生する。形態的にはほとんど区別できないので、*R. nauseosa* の1品種と考える。京都大学植物園および大津市石山千町、コナラ属の樹下で採集。

□橋木 保: 日本のスミレ A5、原色図 8、凸版と写真版 140、本文 206 pp. March 15, 1967 誠文堂新光社、¥1,000。

自他ともにスミレにつかれているという著者多年の蓄積をまとめられたもので、本文に加えてスミレ類に關係あるいろいろなことなどをつけ加えてある。巻末につけてある「索引をかねた学名整理表」12 頁は、異なる著者等が別々に発表した学名を整理した便利なもので、スミレの名義としての役目をも果している。本書中には前川文夫教授の関与された部分もあり、また、植物栽培の達人である鈴木吉五郎氏の「スミレを作る」という栽培の秘法の一端をもらした項もある。(久内清孝)

○ホザキイチヨウラン (水島正美) Masami MIZUSHIMA: On *Malaxis monophyllum* Sw. in Japan

周亜寒帯要素の本種は、針葉樹林帯に散生し、花の唇弁が上向きに位置すると記されている。このような咲き方をするラン類は少ないので、著しい特徴とすることができる。ところが大体「上向き」2 に対して「下向き」1 の割合で、唇弁が下に位置する花を開く株が見られる。後者は既に D.S. Correll (Native Orchids of N. America p. 260, 1950) によって日本もあることに言及されており、主として北米東北部に分布するもので、*M. monophyllum* var. *brachypoda* Morris et Eames (= *M. brachypoda* Fern.) と呼ばれる変種に当る。この事実は東亜と北米東部とのフロラの連関に1例を加えるものであり、欧亜大陸に広布する唇弁上位形 (var. *monophylla*) の方が多いことをも考えあわせば、第三紀末氷期におけるベーリング地域の陸橋的役割を肯定せることになる。台湾の *Microstylis arisanensis* Hay. と命名されたものはホザキイチヨウランであるが、基準標本での唇弁は下向きであり、var. *brachypoda* の方の異名にすべきである。また中国四川省の峨眉山中腹 (VII/1910, 山薦一海, TI) の個体も下向き形である。これらは var. *brachypoda* の残存分布域なのであらうか。唇弁が花の上側に位置することは、花柄や子房の 360° 回転によるものであり、下側に位置することは、180° ねじ